

サムライ in 幻想郷

Nピーマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

・東方Projectと真・女神転生IVのクロスです。

・Nルートを進み、天使、悪魔サイドを滅ぼした後の主人公が、東京各地の復興のため

民を導くサムライとして、またハンターのチャンピオンとして奔走していたところ、突如として幻想郷の地に降り立つ事になり、色々な異変に巻き込まれていくといった話です。

※原作ネタばれ・二次創作特有の自己解釈が多分に含まれるかもしれませんので

ご注意ヲ……。

※主人公のレベル↓カンスト

チャレンジクエスト↓全クリア

目次

プロローグ	1
悪魔に恐れられしサムライ	9

プロローグ



幻想郷

外界とは隔絶されたこの土地には数多くの人外達が住む秘境である。

恐怖の象徴であつた怪異・妖怪、信仰し敬い恐れるべき神々、その他の伝説上の人外達の

いずれも科学技術の発達したことにより、人々の記憶から、心から忘れられかの地へと流れていく。

元からいたのか？と

そう、その名の通り、幻想になつて

そんな彼の地の巨大な湖の畔にある、その異常なまでに紅（あか）一色の館。

ただならぬ雰囲気醸し出しているその館は、夜の闇に包まれるとより一層不気味さが

増すだろう。住んでいる者が誰であろうと普通の人間ならば近づこうとはしない。

いや、知っていても好き好んでこの館に近づこうとはしないだろう。

何故なら、この館には恐るべき力と能力を兼ねそろえた吸血鬼姉妹と、当主の親友である魔女、従者達が住んでいるのだから。

幻想郷各所に散らばる勢力でも、力だけならば強力な勢力を誇る、スカーレットデビル率いる紅魔館。

全てはこの館『紅魔館』から、そしてその主である吸血鬼姉妹の姉にして

「永遠に紅い幼き月」の異名を持つレミリア・スカーレットの一言から始まった。

◇

場面変わってここは紅魔館地下の大図書館。

レミリア・スカーレットの親友の魔法使い

「動かない大図書館」ことパチュリー・ノーレッジが管理している魔道書の図書館で、どう言った訳か、館全体、いやそれ以上の広さを誇るこの図書館に

びっしり置かれてる本棚に所狭しと並んでいる魔道書。

これらは長年にわたる彼女の魔法探求・研究の集大成であり、彼女の財産でもあった。

その財産を勝手に借りパクしていく人間の白黒魔法使いがいるのだが、それは割愛しておこう。

その図書館のテーブルに座り、相変わらず魔道書を貪るように読み、

何かの魔法に関する研究に没頭する寝巻きのような服に身を包んでいるパチュリー、

そしてパチュリーの対面に座り暇そうに頬杖を立てている、外見は幼く、その実数百年の年月を生きている吸血鬼レミリア。

そして、当主レミリアが一言。

「暇」

「丁度良かった。なら自分の部屋に戻りなさいな」

「つれないわね」と愚痴を零す彼女にパチュリーは内心溜息をついた。なるべく魔道書に集中し研究を続けたいのだが、如何せんこの我がまま当主が

自分の気を引こうと様々な話題を振っていた。

やれ此間の宴会で博麗の巫女、霊夢とじゃれあつただの、最近召還したホブゴブリンは

知能が低くて使い物にならないだの、何回も聞いたことのあるような話題を振ってきているので若干ウザイと思っている。お前は何回も同じ話しかしないボケ老人かと思ひ切り突っ込んでやりたい。

だがこんなしょうもない事に突っ込んで労力を使うというのもやるせない。

と思っっているので敢えてスルーしていた。

「パチエ、今物凄く失礼な事考えなかつた？」

「別に」

パチュリーは素知らぬ顔でそのまま魔道書のページを捲る。

少し時間が経った後、またレミリアは尋ねてきた。

「ねえ、パチエ」

「・・・何？集中したいのだけけれど」

パチュリーの表情にあまり変化が見られないが声質は若干イラつき気である

事が伺える。だが、それに気づいてないのか、はたまた知ってて尚話題を出しているのか、長年共にした親友である事を考えれば恐らく後者であろうが……。

そして、彼女は唐突にこう振り出した。

「サムライってかっこよくない?」

「待てどうしてその話になった」

宴会の話、使い魔の話からいきなり時代劇染みた発言をしたレミリアに対し、

とうとう突っ込みを入れてしまうパチュリー。

「最近購入したテレビとDVDプレイヤーで映画見たら憧れたのよ。

いやー、三船かっこいいよ三船。座頭市もいいわね」

座頭市は侍じゃない、という突っ込みは留めておこう。キリが無い。

「……はあ、だからどうしたってのよ。」

半分、呆れ気味になりつつも、唐突に新しい話題を振った彼女が、自分にきつとまた碌でもない「提案」と言う名の我がままが言い下されるのだろうか

まで予想して見る。いや、十中八九そうだろう。

今まで無茶振りに答えてきた彼女には分かった。

そしてレミリアはそんなパチュリーの予想に答えるように、こう言った。

「ちよつと、サムライを召喚してみせてよ」

『予想的中。レミイの悪い癖が出た。』とパチュリーは今度は心底溜息をついた。

◇

図書館でも開けたスペースにて、召還の儀を行う事になった。

使い魔である赤いロングヘアの少女の姿をした小悪魔、通称：こあに、

召還の内容の書かれた魔道書や文献を用意させ、それに反りながら魔方阵を描いていく。

最初こそくだらないとは思っていたが、たまには趣旨を変えて見るのもいいかもしれないと

この時パチュリーは思っていた。

紅魔館とはある従者の能力にて、外から見た館の大きさは比べ物にならないくらい拡張されている。

その広さは、何の考えもなしに、うかつに出歩けば出口に辿り着く事もできない程である。（窓を突き破るのであれば別だが）

よつてこの紅魔館は随時人手不足であり、賃金コストの低い妖精や召還したホブゴブリンを多く使役しているのだが、先程レミリアが言っていたように、この妖精とホブゴブリンは知能があまりよろしくない。

紅魔館の中を迷ってしまったたり、目的を忘れて遊び始めてしまったり、妖精特有の悪戯癖が出てしまったり、かえって、仕事が増えてしまう事もしばしばである。

勿論、襲撃に合った際、それらが防衛の役に立つ筈もない。

なので、良い機会に使い魔の趣向を変えて見ようと考えた。

現代にそもそもサムライなんていう種類の人間がいるかどうか分からないが……。

レミイのお望み通りのサムライとやらが出てこなくとも、自分が本腰を入れた魔法陣だ。

少なくともホブゴブリンよりかは役に立つ奴が召還されることだろう。

「準備が出来たなら早くサムライ出してよサムライ！」

何故こんなにもテンションが高いのか？

というか侍なら幻想郷にもいるだろうに、半分死んでる奴。

まあ、半人前で辻斬り魔だから、侍として認識してなくとも仕方ないか。

……さて、世話の焼ける友人が急かしている。

さっさと召喚を済ませることとしよう。

パチュリィは言葉として聞き取れない呪文のようなものを呟く。

魔方陣に自身の魔力を流し込むと、徐々に魔方陣の色が紫に変色していき、

その紫色が眩い光となり、徐々に彼女らの視界を支配していった。

大図書館が大きな光に包まれた。

.....

腕で目を覆ってどれだけ時間が経ったか？既に魔方陣から放たれた光は止んでいた。

そして、肝心の魔方陣の中心には、

「……」

呆然と立ち尽くす、中性的な顔つきの一人の青年がいた。

青を基調としたコートの下に白い着物。長い後ろ髪は紐で縛っており清潔感がある。

何より彼が腰に差していたのは刀。紛れも無く侍の得物たる物である。

風格も剣士のそれと言って過言ではない。

まさか、本当に侍が召喚されるとは夢にも思わなかった。

レミイに関しては、てつきり感動で動けないのかと思っただが、

さっきの発光で気絶してしまっているみたいだ。

だが、好都合。その方が落ち着いて彼の話が聞ける。

さて……

「召喚しておいて何だけど、貴方は何者なのかしら？」

私に気づいた彼は向き直り、佇まいを整える。

本来ならば、いきなり別の場所にいきなり転移したり、召喚されたりすれば

多少は困惑し、声をかけた私に問い詰める事をするのだろうが、彼は至って冷静だ。

むしろこう言う状況下に慣れているような感じだ。

まるで幾戦練磨のような。

これは久々に当たりを引いたのやもしれない。

「・・・私の名はフリン。先程、召喚という言葉を目にしましたが、いまいち状況下が把握できない。よろしければ事情を伺ってもよろしいでしょうか？」

丁寧でいて、そして物腰柔らかい尋ね方に驚きながらも、

「ええ、こちらとしても貴方の事が知りたい。話し合いの場を設けましょう。」

私は気絶している小悪魔を起こし、メイド長の咲夜に紅茶と菓子受けを持ってこさせるよう命じ、大図書館のテーブル席へ彼を案内するのであった。

途中、彼に『もう一人の彼女は起こさなくても？』と聞かれたが気にしないほうがいいとだけ答えておいた。

悪魔に恐れられしサムライ



「幻想郷……か。」

俺は案内された客室のベッドに座り、地下の図書館で聞かされた事実を静かにそう呟いた。

あの後、紫の髪の少女、パチュリー・ノーレッジと情報を交換した。俺は、自身の居た世界の詳細について、自分がどのような身分であるか、彼女はこの世界の詳細、呼び出した経緯などといったものだ。

先ほど呟いた言葉、幻想郷。つまり現在俺がいる世界の名であり、外の世界、外界から完全に隔絶された世界でありながら、一方で人々の恐れや信仰を無くした神々、その他の人外達が集まる最後の楽園だと、彼女は言った。忘れ去られる、つまり人々の心の隅からも忘れ去れたものが幻想になり、この世界へ入り込むのだという。

神々、悪魔が蔓延る世界……ともすればだ。ここは、同じ系統の世界、別の世界の東京なのだろうか？

「……パロウズ、ここはく東京なのか？」

俺は左腕のガントレットの液晶画面に話しかける。それに反応するかのように液晶画面に女性が映し出される。

彼女はパロウズ、俺がサムライとなった日から今日まで悪魔との戦いのサポート、相談相手として支え続けてきてくれた相棒である。

『いいえ、土地や周りの建造物をサーチしてみたけど、根本的に違う世界みたい。』

俺の問いにその相棒のパロウズが直ぐ返事を返してくれるが、色の良くない内容だ。残念ながら東京とは全く関係無いらしい。

ここが違う東京・・・即ち可能性の世界なのであれば、市ヶ谷駐屯地の「無限発電炉ヤマト」を使えば元の世界に帰れる。だが、東京ではないのであれば、そう言った手は使えないし、異世界に移動する手段があつたとしても、無事に元の世界に帰れる保障は無い。

違う世界に飛ばされるといふのには慣れてる。散々と理不尽にも巻き込まれた。

依頼でも、強力な悪魔の討伐のため、可能性の世界に再び飛ばされた事もある。

だが、だからと言って飛ばされる事に不満が無いという訳ではない。

俺にはやる事があるのだ。復興を遂げていく、東京の行く末を。

混沌と秩序を飲み込み、その上で俺が目指す『中庸』、即ち、人々の可能性を。

それを見届ける義務が俺にはある。二人の友を切った時にそう誓ったのだ。

そんなこれからだ、という中でだ。

「（あの気絶していた悪魔の少女の命令、つまり、遊び感覚で呼び出した訳だ。）」

サムライというピンポイントのキーワードで呼び出したというのだから偶然としても性質が悪い冗談だ。

話を聞けば、パチュリーはあの悪魔の少女、レミリア・スカーレットに命令されやっただけであり、非はあつても落ち度はない。それは分かってる。が、それでも意図せずとも、自然と眉間に皺がよつて

しまう。複雑な気分だ。

『プリン様、何だか顔が怖いわよ』

「……。」

頭を手を当て、そのままベットに横たわる。

『ねえ、プリン様。これからどうするの?』

……これから、か。

俺を召喚した手前、この館の主であるあの悪魔の少女が俺を簡単に手放すとは考えにくい。

少女とは言え悪魔だ。難癖つけた上で、無茶な要求を押し付けて良ように利用されるかもしれない。悪魔は狡猾な奴が多いからな。

しかしだからと言っていざ強行手段に出て逃げ出したとする。

館の規模からして恐らく、この地域では有力な勢力、支配階級の部類に入るのやもしれない。無闇に暴れた結果、指名手配されて最悪、この幻想郷全域を敵に回すという事も可能性にはある。

少なくともこの世界に呼び出されるといふ事は、俺の世界に少なからず繋がりがあるといふ事、帰る手立てはある筈だ。そのチャンスを得るまでは、冷静かつ穩便に行動したいものだが……。

「悪魔召喚プログラムの起動は?」

『問題ないわ。通常通り作動できる。誰か召喚する?』

「……いや、今は必要はない。だが、万が一という事もある。いつでも作動できるようにしておいてくれ。」

戦いが絶対に起きないとは保障できない。そこらの木っ端悪魔であれば俺だけでも十分だが、これだけの館の主だ。そこらの悪魔とは全然違うだろう。気を引き締めなければ……。

コンコンツ……

不意に部屋にノックの音が響く。

「……どうぞぞ」

そう返事をする、侍従らしき銀髪の少女が部屋へ入室して来た。

地下図書館で会った、紅茶という茶と焼き菓子を持ってきた、確か、咲夜という名だったか。

「お嬢様の意識が戻られました。貴方様を部屋までお連れしろとの事なので、宜しいでしょうか？」

「ああ、構わない。」

この館の当主直々のご指名か。

さて、なるべく争わない方に持っていきたいが、どう事が動くことやら。

コンコンコン……

「お嬢様、客人のおサムライ様をお連れしました。」

「入りなさい」

その返事を聞き、侍従の彼女は部屋の両開きのドアを開ける。

俺の居た客間よりも2倍程大きく、また豪華な調度品、支配階級が寝る様な大きなベッド、小さなテーブルに載せられたティーセット……。正しく貴族であるという事を象徴しているような部屋であった。

ただし、必要最大限しか明かりが灯されていない上薄暗く、ここもまた色濃い紅で埋め尽くされていた。

紅魔館、その名の通りこの館は壁も通路に敷かれたカーペットさえも紅一色である。

調度品までは流石にそうは行かなくとも、これだけ紅で統一しているとなると呆れを通り越して感心が変わってくる。見事なまでの拘りだ。勿論、悪趣味的な意味合いでだ。

ある意味人間と悪魔の権力者は似ている。変な所で見栄を張る所が。

そして俺の正面のソファには、あの図書館で気絶していた悪魔の少女が座っていた。

「ようこそ、お客人のサムライ。待っていたわ」

そう言うと、腰を下ろしていたソファから立ち上がり、優雅に、かつ堂々と俺へと視線を向けた。

「私はこの紅魔館の当主 レミリア・スカーレット。先ほどは無様な姿を見せ付けて申し訳ないわね。性質上、光に弱い種族：だから……？」

自身の身分と名を紹介し、俺の顔を見た瞬間

「……。」ピシッ

当主の悪魔の少女レミリアの表情が無表情のまま固まった。「？」

何故か余裕げな表情のまま止まってしまった。

しかも、心なしか顔色も悪くなっているような感じだ。

「……。」さ、咲夜。」

ちよいちよいと手で来るよう、侍従の彼女に合図している。

そして呼ぶや否や、咲夜の耳元で必死に何かを訴えている様子だ。

……一体どうしたと言うのだろうか？

唐突だが私は吸血鬼、ヴァンパイアという種族の悪魔である。

様々な種族が住んでいる幻想郷だからこそ忘れがちだが、私は強力な妖怪であり、吸血鬼という種族の中でも上位に入ると自負している。だから、幻想郷に通じている魔界へ行っても、木っ端の悪魔共は私を見れば恐れ慄くし、有力な悪魔にもそこそこの顔が利く。

そして当然、そのおかげで魔界から外界、その他の世界へ進出している悪魔達から情報を得ることができるのだが、そのおかげで、私はこの状況に非常に戸惑っていた。

『何で・・・何で、天使と悪魔の軍勢を滅ぼした“サムライ”がここにいるのよお・・・?!』

長髪ポニーテールで中性的な整った顔立ち、青を基調とした制服に白い装束を着飾るその姿は、いつの日だったか、かつて魔界を震撼させるニユースの中で聞いた人間と同じ格好をしていた。

魔界を震撼させるニユース・・・それは一人間が、魔界の王であるルシファー率いる悪魔の軍勢、それも木っ端ではなく、爵位を持ち、軍勢を指揮する程の実力を持った大悪魔、そしてその他神話に出てくる魔王クラスの者達を滅ぼし、更にルシファーまでも討ち取ったという話だった。

悪魔王率いる悪魔の軍勢は現在壊滅し、ルシファー自身も行方が知れずとなっている。

だが、それだけではない。ヘブライ神族たる四大天使率いる天使の軍勢までも滅ぼし、さらに人と四大天使が合体し造られた究極の神の御業、神の戦車メルカバーまでも破壊したとも言われている。

本懐である大魔王や神の戦車に出会うまでに、一体何百・・・いや何千の天使、悪魔を屠ったか。

それを、数名と仲魔の悪魔と共に戦ったというがそれを差し引いても常識の外の化け物である。

人間の範疇を超えている彼のサムライ・人外ハンターという肩書きと素性、似顔絵が出回っていた。そしてこう記されていた。

『このサムライなる者、最早人の枠を越えし者なり。

人間の範疇にあらぬ者 彼の者 魔人 の域に達した。

この者に遭遇すべからず、抗うべからず、ただ逃走すべし。

さもなくば、悪魔であろうと、天使であろうと、平等に死が与えられよう』

と・・・。

魔人・・・神・天使・悪魔にも属さない非常に強力な悪魔であるがそれ以外謎に包まれている。ある時は、所々破け、古びた袈裟を身に纏った即身仏、あるいは終焉のラツパを吹く天使、幼き外見に似合わず、無邪気ゆえに残虐な幼女といったように、魔人といっても様々な者達がいるが、分かるのは、唯一つ。

“ 出会えば逃げることは叶わず、その先あるのは “死” あるのみ。

チラリと彼の様子を伺う。

「……………」ゴゴゴゴ

ジエノサイドオーラを醸し出しているヤヴあい。

流石に今の言葉を理解するのに、物の数秒掛かった。

このジェノサイダーをこの紅魔館に置くと申したか？この瀟洒なメイドさんは？

普通にそこらの悪魔を相手に戦う人外ハンターならまだいい。許せる。

だが、この男は、そこらの勢力とかいうチャチなモンじゃない。悪魔と天使の勢力をジェノサイドした男だ。

てか、さつき話したつもりだったのだが、え？聞いてなかったの咲夜？

「我が紅魔館の客人対応の上、出来る限り支援はさせていただきますので、どうか寛大なお心で主を許していただけたらと・・・。」

そこまで、咲夜は言うど、深く頭を下げた。

「……………はあ」

サムライは降参とばかりに手を挙げ、そして深く溜息をついた。

「そこまで畏まらなくてもいい。そこまで怒ってない。その提案、ありがたく受けよう。宜しく頼む。」

ちよ、おい？話がドンドン進んでいくんだが?!私の意志は？私この館の当主!!ちよっと待つテ!展開早スギイ!!

「という訳なのですが、お嬢様?」

唐突な同意を求める問い。そして静かに私を見つめるサムライ……………

当然、反対に決まってるじゃない!ええ、反対って言ってやると

も．．．．言つて．．．．言つ．．．．て．．．．

「俺は サムライ フリン 今後ともヨロシク」

「こ、今後とも、ヨロシク．．．。」

サムライのその挨拶に、私は屁たれた．．．。スイーツ（笑）

こうして、紅魔館にサムライ（人外）が住み込むことになった。
自分が撒いた種とは言え．．．．．

『どうしてこうなった．．．。』